



きらきら

11月2日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

11月2日のおはなし「きらきら」

「はと？」

おまえが言う。ごろっぽーごろっぽーとくぐもった声で鳴きながら、数羽の鳩が公園をよたよたと歩き回っている。ときおり枯れ葉なのか、つついて、くわえて、ぽたりと落とす。それを見ながらおまえは繰り返す。

「はと？」

「そう、鳩だよ」

わたしは答える。満足そうににんまり笑うと、おまえは鳩たちの後を追う。数羽の鳩がすぐに羽を広げ、数メートル先に着地する。さらにおまえが追うものだから鳩たちは迷惑そうに飛び立ってしまう。おまえはそれを見上げてその場に立ちすくむ。

わたしは再び文庫本に目を落とす。

ベンチは午前の日差しだけでは十分に温まっていない。風も肌寒くあまり長居はできないかな、と思いながらページをめくる。話が頭に入っていないことに気づき、また元のページを読み返す。

「パパさんと一緒なの、良かったねー」

常連のおばあさんの声がする。いつもこの時間、この公園で会う杖のおばあさん。小柄で、表情が乏しく最初は少し意地悪そうに思えたが、それは何とかいう病気のせいらしい。話すうち、本当はとても人なつこくて気の利く人なのだということがわかってきた。

「ばば」

そう言いながら、おまえはわたしを指さす。わたしはおまえにうなずき返し、少し腰を浮かすとおばあさんに会釈する。おばあさんは無表情なりに、精一杯目をきらきら見開き（きつとにここにしているつもりなのだろう）、わたしにうなずく。

「いい天気になりますよ。今日はいい天気になる。たっぷり遊ぶといい」

「すずめ？」

木の枝にたくさんとまって、じゅくじゅく鳴いている雀どもを首を傾けて見上げながらおまえが言う。

「雀。そう、えらいねえ。雀だよ」

おばあさんが答え、おまえは笑う。それから目の端をすい、と横切る影に気づき空を仰ぐ。池の上を飛び回るその姿を見て、自信満々にわたしをふりむきおまえは言う。

「つづめ！」

わたしは吹き出しながら答える。

「おいしいな。つづめじゃない。燕だ」

「つ、づ、め？」

「燕。つ、ば、め」

「つばめ」

「そう、燕」

おばあさんはとことこと近づいてきて、ベンチの前でほとんどぶつかりそうにしながら立ち止まり、よっこらしよと小さくつぶやいて腰を下ろす。

「元気そうじゃないの」

「おかげさまで」

おまえも仲間に入れて欲しいのかベンチの傍らに来るが、ベンチには座らずその場にしゃがみ込み、地面をいじりはじめる。

「大丈夫だよあの子は」

おばあさんが言う。何と答えたらいいのかわからないのでわたしは黙ってうなずく。

「ああやって、もう一度覚え直しは始めている。すごいことだよ」

本当に覚え直しは始めているのならいいのだけれど。
「あたしはこれから忘れるだけだ。でもあの子は覚える。利発な子だ。賢い大人になる」
そう言うと同意を求めるようにわたしの方に顔を向ける。わたしは微妙な顔をして黙っている。
そこへおまえが何かを見せびらかしに来る。

「きらきら」

おばあさんは目を細め、子ども相手の高い声を出しながら言う。

「ああ。きららだねえ。本当にきららだ。よくわかるねえ」

「何ですか？」

「きらら。雲母ですよ、ほら。これをみて、『きらきら』だって、よくわかってるんだ」

おばあさんが盛大に褒めるのでおまえは得意げだ。だからわたしも笑顔を浮かべ、おまえをほめる。

「すごいなあ。きららって言うんだって。名前、あてちゃったな」

どこから出てくるのかよくわからない、ふおっふおっという笑い声をたてながら、おばあさんはよっこいしょと杖をついて立ち上がり、わたしを振り向き、念を押すように言う。

「ほらね、大丈夫。あの子は、奥さんは戻ってくる。きっと戻ってくるよ」

雲母を不器用に手のひらに載せて眺めながら、おばあさんのいなくなった場所におまえは座る。わたしは文庫本を閉じて、スカートのすその砂埃を払ってやる。風に乱れた髪を整えてやると、おまえは年齢にふさわしい大人の顔つきになる。ふいにおまえが顔を上げる。

「はと？」とおまえが言う。

「そう、鳩だよ」とわたしは答える。

(「雲母」 ordered by kyouko-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブックログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただけると大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じをご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して.....って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ほくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひご一緒に盛り上がってまいりましょう。

きらきら

<http://p.booklog.jp/book/37292>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/37292>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/37292>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.